

他者とのより良い関わり合いの中で 音楽の喜びや楽しさを生む授業づくり

— リズムアンサンブルを通じて —

吉田 布由美¹

生徒が自己のイメージや思いを伝え合ったり、他者の意図に共感したりできるようにするなどのコミュニケーションを図る指導を工夫した音楽の授業づくりが求められている。本研究では、他者との関わり合いを大切にしたい音によるコミュニケーションを取り上げ、個人では得られない協同する喜び、伝え合う喜び、音や表現が合った時の喜びを体感することを通じて、音楽の喜びや楽しさを生むことへの成果を検証した。

はじめに

中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年9月）（以下、「解説音楽」）の「指導計画の作成と内容の取扱い」に、「生徒が自己のイメージや思いを伝え合ったり、他者の意図に共感したりできるようにするなどコミュニケーションを図る指導を工夫すること」（p. 65）が新たに記載された。

この背景として、中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年1月）（以下、「中教審答申」）の「7. 教育内容に関する主な改善事項」において、音楽科における言語活動の充実のための改善の観点として、「体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する」（p. 53）「合唱や合奏、球技やダンスなどの集団的活動や身体表現などを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする」（p. 54）ことが重視され、自己表現の場面、体験の共有の必要性が示されたこともコミュニケーションを図る指導の充実につながっていると考えられる。

しかし、自己の指導経験を振り返ると、生徒の中には、自分の気持ちがあまく伝えられない、他者とのより良い関わり合いの経験が少ないといったことから、音楽活動の中でも自らの表現する力を十分発揮しきれない、合唱・合奏の活動に喜びや楽しさを見いだせない生徒を見ることがあった。

研究の内容

1 研究の目的

西園・伊野（2008）は、「音楽は世界中どこに行っても共通に心を通い合わせることができる手段となり、共有し合えるものである。音楽活動はまさに音による

コミュニケーション活動」であると述べている。また、村山（2012）は、「みんなで楽しむ音楽活動は、音楽の楽しさや喜びをさらに大きく」と述べている。音楽は、言葉にならない思いを表現する一つの手段になり得る。また、音楽を共に表現したり、鑑賞する時の一体感、感動の共有は、音楽の醍醐味の一つとして、人と人を結び付ける力があると考えている。

そこで本研究では、他者とのより良い関わり合いを大切にしたい音楽活動の中で、音楽の喜びや楽しさを見いださせるための指導の在り方について実践を通じて明らかにしたいと考えた。

2 目指す生徒の姿

中教審答申に、改善の具体的事項として、「合唱や合奏など全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して、表現したいイメージを伝え合ったり、協同する喜びを感じたりする指導を重視する」（p. 96）と記載された。このことを踏まえ、音楽活動の中で他者とのより良い関わり合いをもたせるという観点から、次の三つを行うことにより、音楽の喜びや楽しさを実感する様子を目指す生徒の姿とした。

- ①協同する
 - ②リズムや表現を合わせる
 - ③表現したいイメージを伝え合う
- ことにより音楽の喜びや楽しさを実感する姿

3 リズムアンサンブルの有効性

今回のテーマについて取り組む上で、初めに扱う題材として、リズムアンサンブルの活用は次の2点において有効であると考えた。

①「音楽はリズムをもち、音程が確立して、はじめて音楽であるということができるのである」（黒沢 1990）、このことからリズムは音楽の原点であるといえる。そこで、リズムを学ぶことは、他の音楽活動にもよい影響があると考えた。

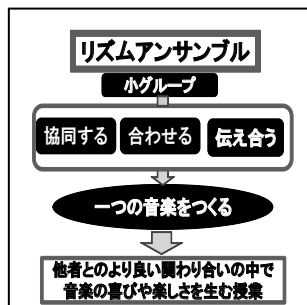
1 藤沢市立御所見中学校
研究分野（授業改善推進研究 音楽）

②読譜に伴う既成の概念で束縛されることが少なく、表現活動に入っていきやすいと考えた。

以上のことから、他者とのより良い関わり合いの中で音楽の喜びや楽しさを生む授業をつくるための一つの手段として、本研究では、リズムアンサンブルを取り上げることとし、今回は、その中のクラッピングを行うことにした。

4 研究の構想

リズムアンサンブルを通じて、小グループで一つの音楽をつくっていく。その活動の中で、**協同する** **合わせる** **伝え合う**という音によるコミュニケーションから、他者とのより良い関わり合いの中で音楽の喜びや楽しさを生む授業づくりを目指す。第1図は研究構想図である。



第1図 研究構想図

5 所属校生徒の実態調査

生徒の実態把握と授業後の変容を見る目的で、「特定の課題に関する調査（音楽）」（国立教育政策研究所2008）の設問を基に、事前・事後調査として音楽の学習に対する意識アンケートと音楽の学習調査を行った。事前と事後は発問順番のみを変え、同じ設問で行った。

6 研究の手立て

(1) 学習形態・方法の工夫

ア 指導形態の工夫

(ア) 小グループの活用

今回の研究では、1グループ6名を基本の人数として行った。小グループで活動することで、一人ひとりの発言回数が増え、一人ひとりがグループ活動に関わる場面をつくることができるようにした。

(イ) 生活班の活用

他教科の授業、昼食時間、係活動等で生活班を活用することが多いため、同じ班を活用することで、活動にスムーズに入っていくことができると考えた。

イ 指導方法の工夫

生徒同士が関わり合い、リズムを聴き合う、表現方法を話し合う等の学び合いの活動を音楽活動の中に意識して設定することとした。

(2) 教材の開発

音楽活動の中で、関わり合い、コミュニケーションをとる必要がある楽曲を使用したいと考え、リズムアンサンブルの楽曲を開発した。開発にあたっては、以下の工夫を行った。

ア 形態の工夫

(ア) 3パートの編成 **協同する**

1グループ6名を3パートに分け、複数名で一つのパートを受けもつこともできるようにし、学び合う機会を増やした。

(イ) リーダーパートの設定 **協同する**

第1パートをリーダーパートとして設定した。難易度を若干高くし、他のパートを導くような編成にすることで、グループ活動の活性化をねらった。

イ 楽曲の工夫

(ア) ユニゾンのリズム **合わせる**

リズムが合ったという実感を得やすくするために、すべてのパートが同時に同じリズムになる、ユニゾンのリズムを楽曲中に多く使用した。

(イ) 呼びかけ応答のリズム **協同する**

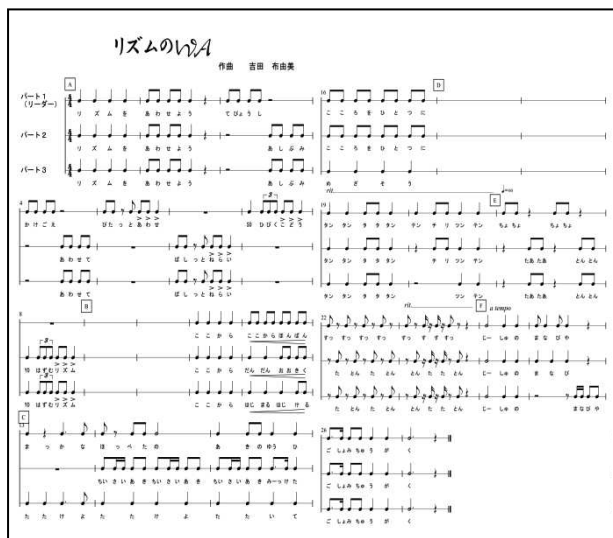
協同する観点から、会話のようになっている呼びかけと応答のリズムを使用した。また、創作活動でも、このリズムを使用できるように考えた。

(イ) 創作活動 **伝え合う**

音楽をつくる過程でコミュニケーションの方法を学び、仲間と共に表現したいイメージを伝え合う場面の手立てとして、今回は、楽曲中の2小節ずつ、2カ所を創作部分とした。

(イ) 日本の伝統音楽のリズム **合わせる**

「間」等を含めた日本の伝統的なリズムは、相手の息づかいや雰囲気を感じて合わせる必要があり、他者との深い関わり合いをもたせることに有効と考え、楽曲中の3小節間に設定した。また、今回は、歌舞伎の伴奏音楽としても使われる小鼓・大鼓のリズムを取り入れ、「間」についても楽譜上の一カ所に設定した。



第2図 自主開発教材「リズムのWA」

楽譜は、2種類作成した。1種類目は、初めに提示する時に使用した。リズムを理解させやすくするために、リズムに言葉をつけた楽譜である。2種類目は、リズムにボディーパーカッションを加えたものを作成し、題材の中間部分で使用した。

第2図は、初めに提示する時に使用した（1種類目の）楽譜である。

7 検証授業

(1) 検証授業の概要

実施期間：平成24年9月25日～10月23日

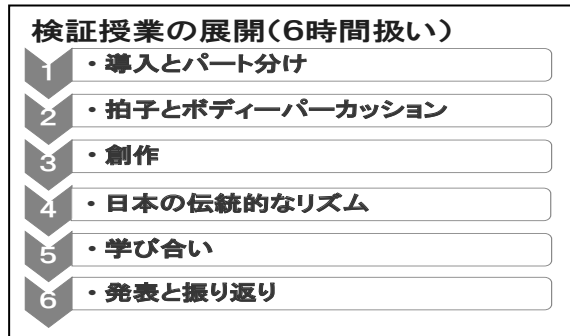
対象生徒：第2学年3学級（114名）

授業時数：6時間

題材名：「他者とのより良い関わり合いの中で音楽の喜びや楽しさを味わおう」

教材名：「リズムのWA」（自主開発教材）

本題材では、音楽活動の中でコミュニケーション、他者との関わり合いを多くもたせることをねらいとして作った開発教材「リズムのWA」を使って、グループごとにリズムアンサンブルを行った。6時間を通して、「グループでの創作活動」、「グループで間を合わせる」等の学習活動を行い、最終的に音楽の喜びや楽しさをもたせられるような組み立てとした。検証授業の展開を第3図として示す。



第3図 検証授業の展開

(2) 検証授業の様子と展開

第1時【導入とパート分け】

題材の目標の提示、リズム遊びの導入を行った後、「グループで一つの音楽を作るためにはどのようなパート分けにすればよいか」というように、協同することを念頭に置いてパート分けを行い、グループの話し合いによりパートを決定させた。

グループごとに工夫して、どのようなパート分けにすればより良い音楽活動になるか考える姿が見られた。

生徒の感想から

○手をたたき音が大きい人をリーダーパートにして、リズムの土台をつくるようにし、音が小さい人には、サポートができるようにペアを組んだ。

第2時【拍子とボディーパーカッション】

拍子を意識した表現活動と、ボディーパーカッションを取り入れた表現活動を通じて、グループで関わりをもたせリズムを合わせる活動を行った。始めに拍子について学び、拍子を感じながら合わせる活動を行った。特に1拍目の強拍をグループごとに合わせようとする姿が見られた。

次に、足とひざのボディーパーカッションが入る楽譜に取り組んだ。「ボディーパーカッションになると難しい。でも、できるとすごく達成感がある」という感想があり、「達成感やできる喜びを感じた」という記述が多く見られた。また、全体を通じてより良い他者との関わり合いを感じられる感想も聞かれた。

生徒の感想から

○友だちと息が合うととても楽しい。
○分からない所も仲間聞いて分かるようになった。
○グループでリズムアンサンブルをすると、コミュニケーションができるからよい。

第3時【創作】

導入で、一人ひとりが4拍のリズムを創作し、クラス全員で繋げていくリズムリレーを行った。参加した全員がリズムリレーを行うことができ、それぞれの個性的なリズムに関心をもって取り組む姿が見られた。また、一人の音にクラス全員が耳を傾け、リズムを繰り返したたくことで、個人の創作したリズムをクラス全体で共有する場となった。

次に、その活動を楽曲中の創作活動につなげた。始めに個人で2小節（8拍）のリズムを考えさせ、次にグループごとに表現したいリズムを伝え合いながら、グループのリズムを創作していく活動を行った。

生徒の感想から

○創作をしてみて、自分達でリズムを考える時、一人ではあまり意見がわからなかったけど、みんな意見を出し合うと、こんなものもあるのかと、発見できたことがたくさんあった。その中の一つに決めるのが、みんな良くて難しかった。
○グループで考えると、思ってもみなかったものがでてきて、「こんなのがあった」って思ってたし良かった。

第4時【日本の伝統的なリズム】

楽譜上の3小節にわたって組み込まれている「日本の伝統音楽のリズム」をグループで合わせる活動を行った。「アイコンタクト」や「息づかいを見る」、「表情を見る」というグループごとの工夫が見られた。また、「心を合わせなければ合わない」といった記述も多く見られた。この活動を通じて、より深いコミュニケーションを使って、リズムや表現を合わせていった。

生徒の感想から

○周りの手の動きや、音などで間をとったので、目と耳も使わなければならないのだと分かりました。間をとることで、周りどう合わせるか考えられました。
○僕たちの班は、一人が大きく動作をして、それに周りが合わせるということをやりました。

- 「間」を合わせる時はリーダーが息を吸うのを見て合わせた。
- 「間」のリズムが、班のみんなと心を合わせなければいけないと思いました。合わせるために、顔を見たり、合わせようとする気持ちが必要だと思いました。
- 「間」を合わせるためには、アイコンタクトをしたり、相手のことを見ておかないといけないんだなと思いました。
- 今回は、班のみんなで役割を果たし、とても合わせられたと思いました。心をひとつにしてやれば、とても「リズムが合った」と感じることができました。合わせる大切さを学びました。

第5時【学び合い】

班で学び合い（聴き合い）を行いながら、リズムアンサンブルを仕上げる活動を行った。グループで互いに意見を出し合い、教え合う様子が多く見られ、楽曲の完成度が高まっていった。

また後半では、ペアになって順番に聴き合いを行い、互いへの良い点やアドバイスを付箋に書き、交換するという学び合いの活動を行った。ほどよい緊張感の中、互いの音に耳を傾ける姿が見られ、もらったアドバイスを見てその後の表現を工夫する姿が見られた。リズムが合った時には、歓声があがり、楽しそうに活動に取り組む姿が見られ、達成感や自信がもてたという感想がここまでの中で一番多く記載された。

生徒の感想から

- みんなで協力して楽しく音楽が学べたと思う。
- リーダーが分かるまで教えてくれたので、ありがたかった。
- みんなでできない所を教え合い、協力、学び合いにもできて、自信もついた。

第6時【発表と振り返り】

これまでの練習の成果として、グループごとに発表を行った。各グループともに、真剣な表情で発表に臨み、コミュニケーションを取りながら、アンサンブルを行っていた。また、発表が終わった後に拍手と喝采を浴びると、満足そうな表情を浮かべていた。班の中には、練習ではうまくいっていたが、本番では途中で止まってしまう等思うようにいかなかった班もあったが、感想を見ると「間違ってしまったけど、やったことに意味があった」といった前向きな感想が多く、「できた」「できない」だけではない音楽の楽しさを感じさせることができた。

生徒の感想から

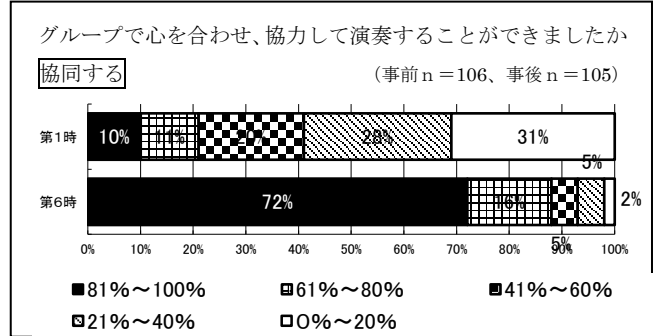
- みんなと合わせることは、心を合わせること。ピッチリみんなと合わせられた時は、すごくうれしかったし、自信をもてました。

8 結果と考察

(1) 音楽の喜びや楽しさの向上

ア 振り返りシートから

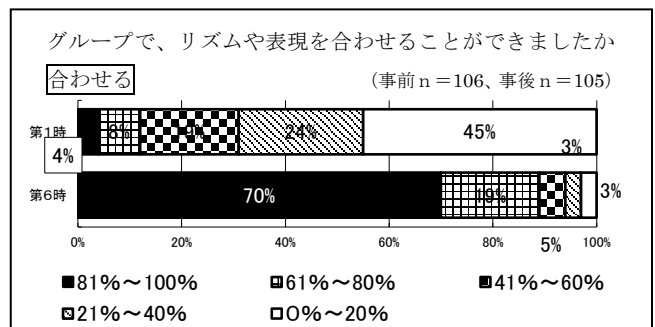
振り返りシートは、毎時間、授業のまとめとして生徒が記入したシートである。各項目の達成率0～100%の中で記入している。それを五つの段階に分け、第1時と最終日の第6時を比較したものが、第4・5・6・7図である。



第4図 振り返りシート①

第4図の結果では、「グループで心を合わせ、協力して演奏することができましたか」という質問に対し、第6時に達成率を81%～100%とした生徒は全体の72%となり、第1時と比較すると62ポイントの伸びが見られた。

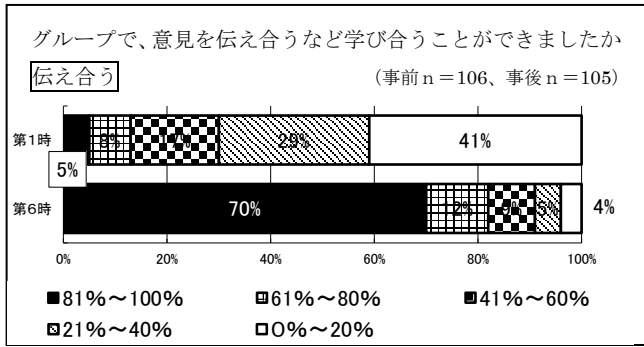
その中で、生徒の感想からも分かるように、第5時で「協力して音楽活動を行うことができた」という内容の記載が多く見られた。そこから、第5時で行った学び合いの活動が、グループで心を合わせ協力して演奏することに特に有効であるということが分かった。



第5図 振り返りシート②

第5図の結果では、「グループで、リズムや表現を合わせることができましたか」という質問に対し、第6時には達成率81～100%の生徒が全体の70%となり、66ポイントの伸びが見られた。

特に、第4時では、「間」を合わせるためにグループ内で工夫した様子が振り返りシートに多数記載されていた。日本の伝統音楽のリズムを扱ったことは、「合わせよう」「どのようにしたら合うだろう」という生徒同士の意識を一層高め、リズムや表現が合ったという実感をもたせることに有効であったと考えられる。

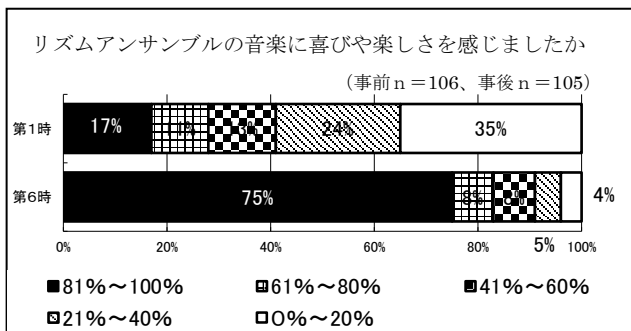


第6図 振り返りシート③

第6図の結果では、「グループで、意見を伝え合うなど学び合うことができましたか」という質問に対し、達成率81~100%の生徒が全体の70%となり、65ポイントの伸びが見られた。

振り返りシートの結果を分析すると、すべての観点において徐々に達成率があがっていることが見て取れ、**協同する** **合わせる** **伝え合う**が相互に関連して、相乗効果を出していることが推測できた。

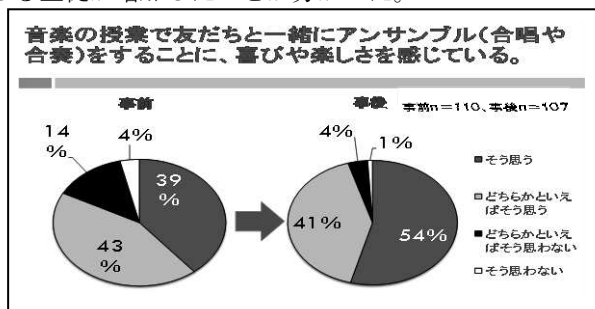
そして、以上の3点が上がるにつれ、第7図の「リズムアンサンブルの音楽に喜びや楽しさを感じましたか」の質問に対しても向上が見られた。



第7図 振り返りシート④

イ 事前・事後調査の比較から

第8図は、音楽の意識調査アンケートの事前・事後を比較したものである。事前には、「そう思う」という回答が39%だったのに対し、事後では、54%と15ポイント増加した。また、「そう思わない」という解答に関しては4%から1%に減少し、他者ととともにアンサンブルという音楽を行ったことに、喜びや楽しさを感じる生徒が増加したことが分かった。



第8図 音楽の意識調査アンケート

ウ 生徒の感想から

次に示すのは、授業の最終日である第6時に書いた生徒の感想である。

生徒の感想

○一人ではなく、みんなで合わせるので、一人が失敗すると、皆が失敗してしまう。それがないようにするために、練習を重ねて来て、班で合わせることの楽しさ、喜びが分かるようになってきた。

○私は、一人で演奏するより、みんなでした方が楽しいと分かりました。みんなでやると、最後までバッチリ合わせられた時のうれしさはすごいし、相手を見ていないといけなかったり、大変だけど、協力がいっぱいできて、絆が深まった気がします。

○すべての班が創作のところが違うのもおもしろかったです。いろいろな人がいるといろいろなリズムができるなと思いました。

一人ではなく、他者と音楽を合わせたことの楽しさ、そこで生まれた喜び、絆、多様な表現への気付き、自信が増していく姿が見られた。

エ 追跡調査から

生徒Aの振り返りシート、音楽の意識調査アンケートを追跡した。生徒Aは、事前アンケートで「音楽が好きだ」という質問に対し、「そう思わない」と回答していた生徒である。また、振り返りシートの「リズムアンサンブルの音楽に喜びや楽しさを感じましたか」についても第1時では、5段階のうち1番達成率の低い段階であった。

しかし、第2時・第3時を通して前向きな姿が見られるようになり、第4時では「もっと協力していきたい」、「もっとうまくなりたい」という記載があった。また、第5時では表現の工夫についての記載があり、より良い音楽にしていきたいという態度が育まれていく様子が見られた。そして第6時では、「みんなと合わせると楽しかった」、「教え合ったりできてよかった」、「自信がつけられたから、うまくなってきたのだなと思った」という記述が見られた。最終日である第6時では、振り返りシートの「リズムアンサンブルの音楽に喜びや楽しさを感じましたか」について、5段階のうち1番達成率の高い段階まで上昇し、6時間の検証授業の中で音楽の喜び、楽しさを感じていたことが分かる。

そして、事後アンケートの「音楽が好きだ」という音楽全般について問う質問に対しては、1段階上の「どちらかといえばそう思わない」と回答した。今回の検証授業の中では、音楽を楽しみ、達成率も増加した姿が見られたが、このような体験を積み重ねていくことにより、さらに音楽活動全般において「音楽が好きだ」

といった心情を育むことができると考える。

(2) 自己肯定感・音楽活動の基礎的な能力の向上

今回の検証授業では、リズムアンサンブルを他者と関わり合いながらつくりあげていく活動を通じて、音楽の喜びや楽しさを得ることに焦点を当てたが、振り返りシートの結果から、「アンサンブルで達成感や自信がもてましたか」、「自分の役割を果たすことができましたか」という質問に対し達成率の増加が見られた。他者と関わり合いながら音楽をつくる活動は、自己肯定感の向上にもつながるのではないかと考える。

また、事前・事後アンケートの音楽の学習調査の比較から、音楽活動の基礎的な能力の向上も見られた。解説音楽では、音楽科の目標で、『音楽活動の基礎的な能力』とは、生涯にわたって楽しく豊かな音楽活動ができるための基になる能力を意味している」とし、「音楽を形づくっている要素は、生徒が生涯のうちに会える多様な音楽を理解するための重要な窓口となる」(p. 8)としている。また、音楽活動を行うためには、音楽に関する知識技能が必要となるという内容も記載されている。音楽活動の基礎的な能力の向上は、今後の音楽活動をより良くしていく力にもなると考える。

研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、他者との関わり合いを大切にされた音によるコミュニケーションを取り上げ、個人では得られない協同する喜び、音や表現が合った時の喜び、伝え合う喜びを体感させるための指導の工夫により、音楽の喜びや楽しさを生むことへの成果が見られた。「協同する」、「合わせる」、「伝え合う」といった他者との関わり合いを授業に取り入れることは、音楽の喜びや楽しさを生むことにつながることが分かった。

2 今後の課題

第8図で示したとおり、「音楽の授業で友だちとリズムアンサンブルをすることに喜びや楽しさを感じている」という問いに対し、最終的に、合わせて5%の生徒が「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と回答した。5%にあたる生徒のワークシート、アンケート等から分析した結果、次の4点の原因が考えられた。

- ①当日の発表がうまくいかなかった
- ②音楽の基礎的な知識の不足
- ③人間関係によるもの
- ④欠席によるもの

①については、発表の結果にこだわらず、前向き、肯定的な意見が多く見られた。しかし、結果がでなかったことで喜びや楽しさを見いだせなかったと感じて

いる生徒が若干名いた。最終的に一人ひとりが自分の表現したいことを表現できるよう指導していくことも必要である。その上で、結果だけではなく、活動の過程も大切だということも伝える必要性を感じた。

②については、基礎的な知識が身に付いていないことが原因と見られる生徒がいた。質問をしたりワークシートに自分の困っていることを記入したりしている生徒には、授業者が個別の指導をしたり所属しているグループに多く目を向ける等支援したりすることで、徐々に音楽活動に加わり、グループの仲間に助けられながら表現できる部分を増やしていった。今後、支援が不十分であった生徒の具体的な支援の在り方も探っていきたい。また、表現活動に入っていくための下地づくりについては、日常の音楽の授業の中でも継続して行っていく必要性を感じた。

③④については、音楽の授業以外の要因も考えられる。しかし、分析をする中で、欠席をしてしまったためそこから活動がうまくいかなかったことも原因の一つと考えられる生徒がいた。欠席者に対するワークシートの提示の仕方や、声かけの仕方についてさらに見直すことも今後の課題だと考える。

おわりに

本研究では、音楽を通じて、徐々に生徒同士の輪ができ、目の輝きが増していくことを実感した。今回は、リズムアンサンブルを取り入れたが、今後、合唱や器楽といった音楽活動にも他者との関わり合いという視点を大切にされた授業展開の工夫を考え、他者と共に味わう音楽の素晴らしさ、喜び、楽しさを伝えられるよう、教材研究、授業改善を進めていきたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社
- 黒沢隆朝 1990 『楽典』音楽之友社 p. 13
- 西園芳信・伊野義博 2008 『中学校教育課程講座 音楽』(株)ぎょうせい p. 48
- 村山ひろみ 2012 「他者との協同による音楽づくりの授業—対話による音楽表現—」(<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008895580>(2012. 5. 14 取得))

参考文献

- 中村祐治・堀内かおる・岡本由希子・尾崎誠 2006 「これならできる授業が変わる評価の実際「関心・意欲・態度」を育てる授業」開隆堂出版株式会社